

明治の歴史地理学者・原 秀四郎

—その伝記書誌的考察—

川 合 一 郎

- I. はじめに
- II. 東京帝国大学卒業までの足跡
- III. 大学院における教育
- IV. 日本歴史地理研究会との関わり
- V. 学位論文の内容とその意義
- VI. 教育活動の展開
- VII. 歴史地名の研究
- VIII. 『日本国史地図 附日本国史地理』の特色
- IX. 郷土誌の研究と最期
- X. おわりに

I. はじめに

原 ^{ひでしろう}秀四郎 (図1) は、わが国において初めて歴史地理学で博士学位を取得した人物である¹⁾。明治5 (1872) 年に生まれ、大正2 (1913) 年に42歳で逝去した、主に明治時代を生きた歴史地理学者であった。その主著である『日本国史地図 附日本国史地理』は、同時代の歴史地理学者をはじめ一般の地理学者や歴史学者からも高く評価された斬新な著作であった²⁾。

しかし従来、原は地理学史あるいは歴史地理学の研究史においては、いわば忘れ去られた存在³⁾であったといえる。歴史地理学の分野で言及されるといえば、明治32 (1899) 年に創立された日本歴史地理研究会の創立メンバーの1人として⁴⁾、もしくは原の学位論文のテーマであった古代東北研究に関連して、

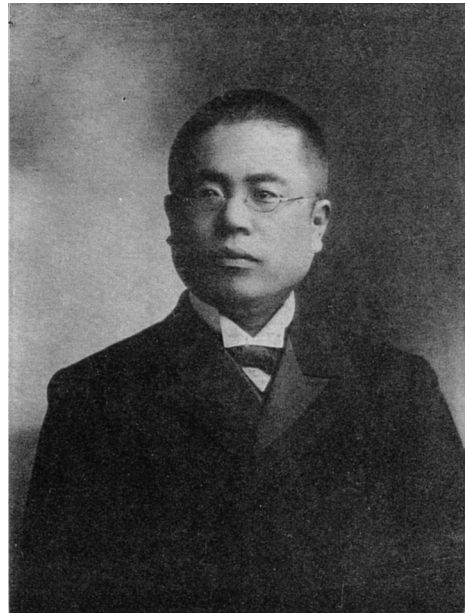


図1 原 秀四郎の肖像

資料：原 秀四郎『越智郡郷土誌材』、渦潮社、1929の口絵より転載

その研究史のなかで取り上げられる⁵⁾程度であり、まとまった人物研究は皆無であった。これは、同時代に比べるとあまりに低い評価といわざるを得ない⁶⁾。

ところで近年、近現代日本の地理学史を明らかにする有効な手段として、地理学者に関する個人研究が注目を集めている⁷⁾。歴史地理学の領域に関わる個人研究も着実に増えつつあり、歴史地理学史研究に広がり深まり

キーワード：原 秀四郎、歴史地理学史、博士論文、歴史地図、伝記書誌アプローチ

が見られるようになった。例えば千田は『大日本地名辞書』の著者である吉田東伍に着目し、その生涯と地理思想を刻明に描いた⁸⁾。また島津は、明治政府の地誌編纂事業に携わり、かつ歴史地理学者でもあった河田 巖^{たけし}の地理的言説や実践を再構成した⁹⁾。

本研究ではこうした潮流を踏まえ、今日忘れ去られた歴史地理学者である原 秀四郎に着目し、その学問的生涯と業績を伝記書誌アプローチ (biobibliographical approach) で説明していくことを目的とする。この伝記書誌アプローチとは、ある人物の学問的軌跡を、伝記 (biography) と書誌 (bibliography) を基礎として全体的に把握しようとするものである¹⁰⁾。忘れ去られたとはいえ、原は当時においては歴史地理学の研究前線を果敢に開拓していった、代表的な歴史地理学者の一人であった。原の学問的事跡を考察することは、あまり研究が進んでいないわが国近代の歴史地理学史の全体像を明らかにする上で重要な営みであると考えられる。

なお、原は歴史地理学者だけではなく、日本史学者や考古学者としての顔も有するが、ここでは原の本領であった歴史地理学の業績に焦点を当てて考察を進めることとする。

II. 東京帝国大学卒業までの足跡

原 秀四郎は明治 5 (1872) 年、愛媛県越智郡波止浜町 (現、愛媛県今治市) で塩問屋を営む原 武一郎の長男として誕生した¹¹⁾。長じて小学校に入学するや「数年の課程を半ばにして修了」という神童振りを示し、その後愛媛県第一中学校を経て第三高等中学校予科に入学、明治 25 (1892) 年 9 月に第三高等中学校の本科二部 (工科・理科・農科) に進んで工学を志した。しかし工学分野が適性に合わないと判断して翌 26 年に本科一部 (法科・文科) に転部している。さらに明治 27 年 6 月に第三高等中学校が第三高等学校に改称され、本科が廃止されると、第一高等学校の

大学予科一部に転じた。明治 28 (1895) 年 7 月に同校を卒業し、その 9 月に帝国大学文科大学国史科に入学している。国史科においては、主に「徳川時代の風俗史」をテーマに研究を進めた¹²⁾。なお、同じ国史科の 3 年には、のち日本歴史地理研究会創立の核となる喜田貞吉がいた。

原は、国史科入学時から歴史地理を志向していたわけではないが、さまざまな機会を通じて関心を深めていったと考えられる。当時、国史科で歴史地理の授業を担当していたのは国史の第一講座教授の栗田 寛であった¹³⁾。栗田は歴史学者ではあったが、『新編常陸国誌』を補正・翻刻するなど¹⁴⁾ 歴史地理的な研究も守備範囲としていた。のちに原が『日本国史地図 附日本国史地理』を出版した際、その序言に栗田への謝辞を記しており¹⁵⁾、栗田との接点が歴史地理に開眼する一つの契機になった可能性はある。しかし近代的な地理学との接触という点では、文科大学教授の坪井九馬三^{くめぞう}の存在が大きいのと考えられる¹⁶⁾。あまり広くは知られていないが、坪井は帝国大学文科大学において近代人文地理学導入に一定の役割を果たした人物である¹⁷⁾。坪井は明治 20 (1887) 年から同 24 (1891) 年までのドイツ留学において「制度史及地理学」を学んでおり、地理学、特に歴史地理学に深い関心と知見を有する歴史学者であった¹⁸⁾。明治 24 年に文科大学教授に就任するが、その担当科目の一つである「史学研究法」には歴史地理学の内容も盛り込んでいたと考えられる¹⁹⁾。明治 26 年に帝国大学が講座制に移行すると、坪井は「史学地理学第一講座」を担当、明治 33 (1900) 年以降は外国人歴史教師ルードウィッヒ・リースに代わって「歴史地理」の授業を担当するなど²⁰⁾、明治という近代地理学の黎明期において長く地理学と関わり続けた人物であった。原は国史科 3 年の時に、坪井の「史学研究法」を受講したと考えられ²¹⁾、その影響を受けた可能性がある。なお、坪井は

歴史地理学を、明治32年10月に創立された日本歴史地理研究会の一部メンバーに見られたような、史学に付属する補助学科ではなく、あくまで「地理学の一分科」として位置づけていた²²⁾。

このように講義を通じた歴史地理との接触に加え、帝国大学国史科では毎年、歴史的都市や古戦場といった史跡への修学旅行を実施したことから、それが原の歴史地理への関心を深めるイベントになったと推測される。この修学旅行の目的は、大学で学んだ「政治史、美術史、古文書学、歴史地誌等」を实地で再確認し、知見を深めることにあった²³⁾。現在確認できる最も古い原の論考・随筆の類は、この修学旅行報告である(表1)。

しかし原の大学時代の研究テーマは、上述のように近世風俗史であり、歴史地理への関心はあったにせよ、本格的な研究開始は大学院入学後であった。

Ⅲ. 大学院における教育

原は明治31(1898)年7月に東京帝国大学文科大学国史科を卒業し²⁴⁾、同年9月に「本邦歴史地理(特に東国地方に関する事項)」をテーマに大学院に進学した²⁵⁾。大学院で歴史地理をテーマに掲げたのは、明治29年に入学した喜田貞吉に続いて2人目であった²⁶⁾。主たる指導教官は喜田と同様、坪井九馬三であったようである²⁷⁾。ここで原の歴史地理学者としての第一歩がスタートする。

原は、指導教官である坪井の歴史地理学観に大きな影響を受けたと思われる。時期は下るが、明治42(1909)年7月から8月に東亜協会の第一回夏期講習会において原が行った講演「日本地理概説(主として国文国史上の地理)」原稿には、歴史地理学を「人事地理学」の一分科とし、「人類が地球表面に生活して社会を成し国家を作りし発展進歩せる事情を説明するもの」²⁸⁾と定義している。この定義は坪井による以下の定義と考え方、用語

の点で通じるものがある。

地殻上に生じたる人類は、社会を成し、国家を組織するに及びその生活の状態次第に単純より複雑に赴き、社会制度複雑なるに従ひ国家制度も複雑なる現象を呈す。而して此等の現象が古来地殻の表面の性質及び変化によりて生ずるものを研究する之を歴史地理学と言ふ。²⁹⁾

このように原は、主に坪井の指導を受けつつも、同時に研究の視野を拡大すべく隣接学科の教官からも知識を貪欲に吸収しようとしていた。具体的には、東京帝国大学の理科大学に積極的に出入りし「物理地理学、地質学、人類学」を学んでいたようである³⁰⁾。「物理地理学」や地質学に関しては、当時の理科大学では小藤文次郎や神保小虎、横山又次郎が地質学を担当しており³¹⁾、かつ3人とも地理学、特に自然地理に造詣が深かったことから、その指導を受けた可能性がある³²⁾。人類学については、同大学教授で人類学者の坪井正五郎の直接指導を受けていたと考えられ、考古学者でもあった坪井からは考古学の手ほどきも受けていたようである³³⁾。これらの学問は、すべてが博士論文である古代東北の歴史地理研究に収斂するものであった。後に提出した原の博士論文に対する審査コメントには「著者が採用したる考査方針は著者が史学歴史地理学地質学考古学等の素養を備えて实地に臨み帰納して得たる所の結果」³⁴⁾と評されており、それを裏づけている。

ちなみに後に京都帝国大学文科大学地理学教室の初代助教授となった石橋五郎が、「政治地理学」をテーマに掲げて大学院に入学したのは明治34(1901)年9月である。その指導教官の一人は坪井であった可能性が高い³⁵⁾。原が大学院を修了したのは明治38年であるから、奇しくも原は、近代アカデミー地理学確立に大きな役割を果たした石橋と、同じ時期に大学院で同じ教官に学んでいたことになる。

表1 原 秀四郎著作目録

明治32(1899).03&04	修学旅行日記(前々号所載佐藤小吉君寄修学旅行報告に接す). 史学雑誌10(3):282-291, 10(4):398-407
32(1899).05	(は、ひ生)「五山に就いて」に就いて. 史学雑誌10(5):513-515
32(1899).07	(は、ひ生)五山に就ては、た生の答弁を読む. 史学雑誌10(7):746-750
32(1899).11	(は、ひ生)五山に就て我研究の一斑を述へておおかたの指教を請ひ、併せて近時世に現はれたる諸家の五山説を批評す. 史学雑誌10(11):1181-1194
32(1899).11	常陸国地誌目録. 歴史地理1(2):46-48
32(1899).11	(二間四面堂主人)古今東西. 歴史地理1(2):60
32(1899).11	地名研究の便法. 歴史地理1(2):65-66
32(1899).11	遣ひ頃なる地図. 歴史地理1(2):66-67
32(1899).11	村岡良弼著 房総游乗・北総詩史(批評). 歴史地理1(2):72
33(1900).01	地名研究の方法. 歴史地理1(4):133-134
33(1900).01	地名研究の一方面. 歴史地理1(4):134-135
33(1900).04	贅語一則. 歴史地理2(1):75-77
33(1900).04	古墳研究に就ての綱目を示す表. 考古1(1):16-17
34(1901).09	(読図生)地名の解釈. 歴史地理3(9):659-662
34(1901).11	日本歴史辞典. 六合館・宝文館他 共著(編者名は歴史及地理講習会)
37(1904).06&09	(二間四面堂主人)研究旅行. 史学界6(6):685-700, 6(9):附図, 935-945
39(1906).05	大島誌料簡略(一). 歴史地理8(5):410-417 田倉紋蔵論文を編集
39(1906).07	日本国史地図 附日本国史地理. 博文館
39(1906).09	薩南海上に於ける地名研究の一節(一). 地学雑誌18(213):581-585
39(1906).07	序. 奄美大島誌料(田倉紋蔵著). 地学雑誌18(211):484-485 序文のみ執筆
40(1907).03	中等国史教科書 第一学年用. 博文館
40(1907).03	中等国史教科書 第二学年用. 博文館
40(1907).04&07	歴史地理談. 太陽13(4):204-210, 13(10):208-211
40(1907).04-42(1909).03	日本史講義. 早稲田中学講義(第一学年・第二学年)
40(1907).05	中等教科にほんれきし地図. 大日本図書 著者名は佐藤小吉
40(1907).08	中等国史地図. 博文館
41(1908).01	曾戸茂梨之処と昭明県. 國學院雑誌14(1):20-23
41(1908).06	東亜の光と日本の光. 東亜の光3(6):30-35
41(1908).06&08	五山の沿革につきて. 有聲24:8-11, 26:16-19
41(1908).08	中等国史教科書 第五学年用. 博文館
41(1908).08	玉造塞趾に就きて(明治四十一年六月二十日本国会例會講演). 史学雑誌19(8):附図, 803-831
41(1908).10	近世地理教科書. 三省堂
41(1908).11-12	日本歴史研究参考書目及解題略. 東亜の光3(11):91-98, 3(12):87-95
42(1909).02	弘法大師と幼時の感想(附, 八十八ヶ所の研究に就きての希望). 東亜の光4(2):121-125
42(1909).02	本邦の歴史名辭をアイヌ語によりて解明すること. 神社協会雑誌8(2):1-3
42(1909).02	四国八十八ヶ所の研究(弘法大師と幼時の感想). 有聲32:11-15
42(1909).03-06	我国原史時代及び有史以前のある期間に於ける文明形式の変遷を論ず. 東亜の光4(3):73-81, 4(4):1-18, 4(5):1-19, 4(6):1-17
42(1909).07	本邦の歴史地図を読む方八則. 歴史地理14(1):63-65
42(1909).10-11	日本地理研究書目. 東亜の光4(10):117-124, 4(11):115-119
42(1909).12	曾戸茂梨之処と昭明県. 神社協会雑誌8(12):10-13
43(1910).03	曾戸茂梨之処と昭明県. 東亜の光5(3):128-132
43(1910).05	新編国民地図 分冊之上. 弘道館
43(1910).06	重ねて曾戸茂梨と昭明県とに就きて. 國學院雑誌16(6):609-618
43(1910).11.11-15&25-27&30, 12.01-03&09-10&23-29, 44(1911).01.10-13, 02.13&15&17&19	吉備真備公伝. 山陽新報
44(1911).05-06	吉備大臣の逸話に就きて. 東亜の光6(5):133-136, 6(6):134-137
44(1911).07&09&10&12	日本の風景. 東亜の光6(7):29-35, 6(9):66-72, 6(10):41-53, 6(12):37-50
44(1911).08	吉備津彦命の御名と其苗裔とに就きて. 神社協会雑誌10(8):9-14
大正03(1914).10	越智郡郷土誌材. 東洋新聞社
昭和04(1929).12	越智郡郷土誌材. 渦潮社

<発行年不明> 日本史講義. 早稲田大学出版部

注1) ゴシック体は単行本を指す。

注2) ペンネームで著した著作については、ペンネームをタイトルの前に括弧書きで記した。

注3) 『日本歴史辞典』は、明治40(1907)年発行の『中等国史地図』のあとがきから原が共著者であることが判明した。

注4) 明治40年4月から2年間『早稲田中学講義』(月2回発行)に掲載された「日本史講義」については、正確な掲載日付が把握できないものもあるため、掲載の年月までの記載とした。なおこの講義は、同じ内容が大正初期まで繰り返し掲載されたが、本表には最初の2年分のみ記載し、それ以降の掲載分については割愛した。

注5) 『中等教科にほんれきし地図』については、原 秀四郎が著作し、著者名を佐藤小吉とする旨の「契約書(明治三十九年七月六日)」が原家に残されていたため、実質的に原の著作であると判断し、ここに加えた。

注6) 『近世地理教科書』は筆者未見。「(新刊紹介)近世地理教科書」, 國學院雑誌15-3, 1909, 302頁を参照した。

資料: 日本歴史地理学会『歴史地理 自第一巻至第六十巻』, 地人書館, 1933, 石山洋ほか編『明治・大正・昭和前期雑誌記事索引集成 人文科学編』(第2巻・第11巻・第21巻・第26巻・第29巻・第39巻・第40巻), 皓星社, 1995~1997など。

IV. 日本歴史地理研究会との関わり

原は大学院在学中の明治32(1899)年4月、喜田貞吉らとともに日本歴史地理研究会(後に日本歴史地理学会)を設立した。原を筆頭に堀田璋^{たまざう}左右、星野日子四郎(文学士)、大森金五郎(文学士)、岡部精一(文学士)、栗田淳綱、熊谷直一郎、藤田明、小林庄次郎、喜田貞吉(文学士)のあわせて10名が発起人として名を連ねていた³⁶⁾。

この研究会の設立については、喜田をはじめとして発起人らの設立当時の回顧談が残っている。喜田の回顧によれば、まず喜田自身と堀田、藤田、小林との間で話が持ち上がり、その後、他の6名を誘って会を発足させた³⁷⁾。しかし堀田の回想は、若干事情は異なる。それによれば「原秀四郎君が大学院で歴史地理学の専攻で有ったから、其関係で、博士が頻りに右の計画をしてみると云ふ事を聞かされた」とあり、設立の契機が原であったことを指摘している³⁸⁾。推進者が喜田と原であるとの認識は、他にもあったようである³⁹⁾。

今日ではその事情を確かめる術もないが、いずれにせよ原は筆頭発起人ではあったものの、会への関与は必ずしも深いとはいえなかった。機関誌『歴史地理』第1巻第2号には「常陸国地誌目録」や「地名研究の便法」、「遣ひ頃なる地図」など計5編の文章を載せ、その後も第3巻までは継続して論文・記事を掲載したが、第8巻を除いてしばらく投稿はなく、結局第14巻第1号の「本邦の歴史地図を読む方八則」を最後に投稿が絶えた(表1)。都合11編の論文・記事数である。これは喜田をはじめ小林、堀田、大森、岡部、藤田といった主要メンバーの投稿数には全く及ばない⁴⁰⁾。またその論考も、力のこもったものというより覚書に近い内容のものが目立ち、主要メンバーとの温度差は大きいといわざるを得ない。明治35(1902)年1月の『歴史地理』

に掲載された「日本歴史地理学会十年史」によれば、原は明治34年末までには「種々の事情」により会の運営から手を引いていたようである⁴¹⁾。結局、会への実質的な関与は、わずか2年程度であった。

歴史地理学をメインテーマとする原が、なぜ歴史地理を標榜する本研究会に意欲的に参画せず、結果的に短期間で会から離れていったのだろうか。会の歴史地理観と大きな相違があったとも思えない。『歴史地理』創刊号に掲載された「日本歴史地理の研究は、性質として一の科学を形成すべきものにあらずして国史研究者に向て、これが補助科学たるのみ」⁴²⁾という言明は有名であるが、この考えは当時編集を任されていた小林庄次郎個人のものであり、喜田や岡部、大森などのメンバーは、地理学の一分野としての歴史地理学を推進したいと考えていた。なかでも大森は、自然地理を中心とする『地学雑誌』に対抗して人文地理的な分野を発達させたいという思いを抱いていたようである⁴³⁾。もともとこの研究会は坪井九馬三の影響下で誕生したものであり、その観点から見れば、会の歴史地理観は原のそれと相容れない性質のものではない。

恐らく一つの理由は、次章でも述べるが、博士論文作成への注力であろう。後年、『歴史地理』に掲載された追悼文にも「自己の研鑽に忙しく、自ら会事に遠かりし」とある⁴⁴⁾。事実、明治34(1901)年頃から同38(1905)年11月に博士学位を取得するまでの間、あまり雑誌などにも執筆していない(表1)。研究発表よりも、調査と蓄積を優先した時代であったのであろう。この時代における研究熱心ぶりは指導教官であった坪井や先輩達を驚嘆させたという⁴⁵⁾。原にとって、大学院は次なる飛躍のための雌伏の時代であった。ただ、博士学位取得後も『歴史地理』にはほとんど執筆しておらず、「自己の研鑽に忙し」かったことだけが理由ではないと思われる

が、詳しい事情は分からない。

V. 学位論文の内容とその意義

明治38(1905)年7月、大学院在学中の原は所定の試験を受け、その結果、同11月18日に文学博士の学位を授与された。冒頭に述べたように、これは歴史地理学では初の博士論文であり、次に学位を授与された吉田東伍に先立つこと3年8ヶ月であった⁴⁶⁾。この試験において原が提出した論文は、自身による「履歴書」によれば以下の通りである⁴⁷⁾。

- ・ 王朝時代東北地方拓殖ニ関スル史蹟ノ研究 五冊 附図 一冊 (主論文)
- ・ 岡山県小田郡三谷村ニ於ケル火葬式墳墓ノ研究 一冊 附図 一冊 (副論)
- ・ 瀬戸内海ニ於ケル帆船航路及ビ港泊ニ関スル研究 一冊 (副論文)
- ・ 国史地図纂 一冊 略解 一冊

このように原は、主論文に加え、3本の副論文を提出している。なお、最後の「国史地図纂」は、「履歴書」上は副論文(副論)との記載はないものの位置づけは副論文であろう。歴史地図集である「国史地図纂」が、内容的に見てそのすぐ前の「瀬戸内海ニ於ケル帆船航路及ビ港泊ニ関スル研究」の附属的な論文とは考えにくく、単なる記載漏れと考えられる。主論文の考察に入る前に、まずはこれら副論文について簡単に触れておきたい。

最初に「岡山県小田郡三谷村ニ於ケル火葬式墳墓ノ研究」であるが、これは同村内における吉備真備関連の遺跡の保存を目的に設立された「吉備保光会」による委託調査の結果である。明治33(1900)年に同会から帝国大学に遺跡調査の依頼があり、原が調査のため派遣されている。原は現地において「吉備氏累代の墓所を研究する為め約十日間に亘り(略)所々の表土を三四尺乃至五六尺づゝ発掘せしに火葬土葬の骨木炭朱及大小各種形状様々なる土器多数を発見⁴⁸⁾した。その成果をまとめたのがこの副論文である。この論

文と同一のものと思われる原稿が原家に保存されており⁴⁹⁾、またその成果の一部は明治37(1904)年に発表されている⁵⁰⁾。二つ目の副論文である「瀬戸内海ニ於ケル帆船航路及ビ港泊ニ関スル研究」については、管見の限り未発表であり、原家にも残っていないため内容は全く不明である。原の生地の愛媛県波止浜は瀬戸内海に面する港町であり、その縁で始めた研究であろうか。瀬戸内海の水運研究は、原のその他の論考にも全く触れられておらず、興味深い論考ではある。最後の「国史地図纂」も未発表であり、内容は不明であるが⁵¹⁾、その簡約版が明治39年に発行された『日本国史地図 附日本国史地理』である。この書物については後章で詳述したい。

主論文の「王朝時代東北地方拓殖ニ関スル史蹟ノ研究」については、本文そのものは未発表であり、かつ東京帝国大学に保管されていた原稿は大正12(1923)年の関東大震災で灰燼に帰したため、残念ながら今日、全容を把握することは不可能である。しかし、幸いなことに原家には最終形に近いと思われる原稿(第二次稿)の過半が保存されており、その構成やおおよその内容を窺うことができる⁵²⁾。また、論文の審査コメントや内容の一部が『史学雑誌』に掲載されていることから、これらの資料に基づいて本論文を考察することとする。

まずその研究目的であるが、原は次のように述べている。

蓋し本書の主意とする処は歴史上古代特に奈良朝及其前後の時期に當つて是等東北地方の諸平原に於ける拓殖北進の事蹟を討尋するものにして更に之を言へば水陸通路の如何に利用され平野郊沢の如何に開拓されしやを觀察せんが為め其現存せる遺蹟を搜索揣摩せんとするに外ならざるなり⁵³⁾

このように本論文は、東北地方の古代遺跡の調査研究を通じて、古代東北における開拓

状況を明らかにしようとするものであった⁵⁴⁾。
そしてその論文の構成は、表2の通りである。これによれば、論文は大きく汎論と各論

に分かれる。汎論では、まず第一章において旧陸奥・出羽両国の山脈や河川、平野、海岸線などの自然的基礎、および港湾や水運、道

表2 「王朝時代東北地方拓殖ニ関スル史蹟ノ研究」の概要

第一篇 汎論

第一章 東北地方地理大要

1. 名称 2. 山脈及河川 3. 平野 4. 海岸線・島嶼 5. 港泊 6. 漕運 7. 通路

第二章 東北拓殖歴史大要

1. 地区と時代との対照 2. 奈良朝以前の事蹟 3. 奈良朝の事蹟 4. 奈良朝以後の事蹟

第三章 東北拓殖史料の分類其性質及其遺存の狀態

1. 史料の分類 2. 地形及地質(山岳及丘陵・平野・砂丘) 3. 遺跡及び古物(遺跡・古墳関係物・古瓦・石材) 4. 地名(国語地名・アイヌ語地名) 5. 図書(歴史・地誌・地図・論説・雑) 6. 雑類

第二篇 各論

第一目 陸奥地方の事蹟

第一章 磐城岩代地方に於ける事蹟

1. 会津石城 2. 菊多白河 3. 氏族北進 4. 道奥国府 5. 辺塞

第二章 陸前地方に於ける事蹟

1. 拓殖版図の北境 2. 閉・香阿 3. 武隈・名取 4. 多賀 5. 宮城・階上 6. 玉造 7. 賀美・色麻・黒川 8. 遠田・牡鹿 9. 北上下流の古道 10. 諸城柵・黄金産出 11. 桃生・遠山・登米 12. 伊治・栗原 13. 覺繁

第三章 陸中陸奥地方に於ける事蹟

1. 衣川・巢伏・東山 2. 贍沢・江刺・閉伊 3. 志波・和賀・稗貫 4. 爾薩体・都母・岩手・糠部・比内・鹿角・徳丹

第二目 出羽地方の事蹟

第一章 沿海平野に於ける事蹟

出羽の語源・都伎沙羅・出羽・田川・飽海・秋田(飽田)・河辺・由理・助川・野代・上遠野・添川・霜別・助川・井口国府

第二章 山中平野に於ける事蹟

置賜・最上・避翼・佐芸・白岩・玉野・嶺基・平戈・村山・雄勝・横河・平鹿・山本・深江・和名抄最上村山二郡の郷名・保宝士野・和名抄平鹿国府

第三篇 補遺

第一章 東北拓殖事蹟の概括

1. 陸奥出羽両方面に於ける拓殖進歩の状況 2. 出羽方面の交通運輸事情 3. 陸奥方面に於ける交通運輸事情

第二章 拓殖と地形との関係

1. 拓殖の順序 2. 城柵郡家の位置

第三章 東北拓殖史研究の余材

1. 拓殖の難易と郡境の寛狭 2. 拓殖北進と古伝解釈(地名南来の事証・陸奥国の鹿島社・日高見国(竹水門・伊寺水門))

附録 王朝駅路の里程を今道に換算することの考

注1) 章以下のアラビア数字は、「項」を意味する(1.は第一項)。

注2) 本論文(原家所蔵)は本来五冊の原稿で構成されるが、そのうち第四冊が残っていないため、そこに含まれる第二篇第二目の第一章・第二章の詳細(「項」の内容)は不明である。ただし、論文の審査結果を記載した本文注34)に該当箇所に関する記述があることから、それを参照に項目のみ列挙した。

注3) 「附録 王朝駅路の里程を今道に換算することの考」は原稿の目次にはないが、原家に「王朝駅路の里程を今道に換算することの考(「王朝時代東北地方拓殖ニ関スル史蹟ノ研究」附録 明治三十六年九月)」(手稿)が残存していたため、目次に加えた。

資料: 本文注34), 注52)

路の概況について述べている。第二章では、奈良時代とその前後の歴史的事跡を略述している。続く第三章では、史料を「地形及び地質」「遺蹟及び古物」「地名」「図書」「雑類」に分類し、その性質や遺存状況を述べている。各論については、表2にもあるように陸奥・出羽両国の事跡、具体的には国府や郡家、城柵、及び交通路などを論じている。補遺では、全体を通覧して議論を概括している。原は「拓殖」とは「概言すれば米作地の創設」であると考え、それに付随して、附近の高燥地に米作地を監視保護する集落や「城柵郡駅」が建設されると説いた。また、開拓の進捗に大きな影響を与えるのは地理的条件、特に交通運輸事情であると考えた⁵⁵⁾。なお、本文とは別に「附図」として67図⁵⁶⁾を添付している。

原は後に、この各論のうち第一目の第二章「陸前地方に於ける事蹟」のなかの「玉造」の項目⁵⁷⁾に更なる考察を加え、史学会の例会で口頭発表している。その発表内容は、史学会機関誌である『史学雑誌』に「玉造塞趾に就きて」の題目で掲載されたが⁵⁸⁾、これが主論文に関する唯一のまとまった発表である。この「玉造」を選択したのは、原自身が快心の出来として自信を有していたためであろう。審査コメントでも、玉造の論証は高く評価されている。そこで以下では、この「玉造」の項目の検討を通じて、本論文の内容や特質を考察することとしたい。

原はこの項において、従来4ヵ所提起されていた「玉造塞」^{たまつくりのき}比定地のうち、あまり注目されていなかった温泉村大字川口にある字^{かわたば}川度（現大崎市）を取り上げ、その当否を論証している。ちなみに玉造塞とは、奈良時代における大和朝廷による東北地方「開拓」の拠点となった城柵の一つである。玉造塞は、軍事戦略的・行政的ランクにおいて多賀城に次ぐ重要な拠点であったが、その所在地を特定する決定的な証拠が見つかっていない状況

であった。原が着目した温泉村説は、『続日本後紀』の承和4(837)年4月戊申(16日)条の「陸奥国言。玉造塞温泉石神。雷響振動。昼夜不止」に見られる「温泉石神」が、この地に現存することから生まれた説であり、国語学者で歴史学にも造詣の深かった大槻文彦がこの説を首唱していた⁵⁹⁾。

原はこの温泉村説の妥当性を、主に現地での遺跡観察や地名解釈、および立地環境の考察に基づきつつ検証している⁶⁰⁾。まず原は、川度集落で入念な地形観察を行ない、その結果、小字「玉の木沢」の地形に注目した。その地は「丘陵にして頂上は平坦」で「所々土工の跡あり」という場所であり、「東西二面は凡て絶壁を為し溪流崖下に激し優に塹壕に代用するを得可し」と指摘している。また南方は「後山に連続」し、北方は「小溪流あり」と観察し、これらの事実から小字「玉の木沢」が城塞としての地形的条件を具備していると考えた。もっとも付近からは石材などの遺物が全く発見できなかったが、この点については「遺跡の土壌は著しく火山灰を含み殆ど泥質を為してその崖際は容易く崩壊せず高壘深塹を作らんとするも必ずしも石材を要せざるもの」と推定し、防塁を構築する上で石材を用いる必要がなかったと論断した。

地名「玉の木沢」については、「たまのき」を「たまつくりのき」の「つくり」が省略された地名である可能性があると解釈した。同じく近くの「馬場」に着目し、これを玉造駅の遺名と考えるとともに、「川度」を「川渡」の転訛と推測し、駅路の渡渉地点に関わる地名であると考えた。

続いて原は、この川度の立地環境を考察している。多賀城以北の道路は北に向かって黒川、色麻、玉造、伊治などの地点を通過するが、玉造＝温泉村説に従うと、色麻から北西方向に向かって玉造に入り、玉造からは東方に転じて伊治に至るといふ、大きく西に迂回するルートを想定しなければならない。吉田

東伍も『大日本地名辞書』でこの説を取り上げたが、「川度は、地勢西に僻にし南北の通路に当らず」と退けている⁶¹⁾。原はこのルートの根拠について、一つは西の出羽方面に通じるためとし、二つ目として黒川・伊治間にある低湿地を回避する必要から、色麻からそのまま北西の温泉村方面に向かったためと考えた。原は実際、このルートを自身で踏査し、例えば温泉村から伊治方面へのルートについて「第三紀層の丘陵を踰ゆるに關せず丘上は平坦なる高原を為せるものなるを以てたゞその第四紀層との經界に小坂路ある外困難を訴ふ可き処なし」とし、地形的抵抗の少ない好ルートとした。一方で色麻・伊治間のショートカットは「丘陵溪澗を横絶して一上一下その煩に堪へざる悪路」と判断し、地域住民も「四十八坂九十九曲」との名称でこの悪路を呼んでいると記した。

またもう一つの根拠として、温泉の存在を指摘した。「医薬の法完全ならざる當時に在つて温泉の所在が特に人烟來聚の原因」と考え、比較の例として『出雲国風土記』に登場する温泉所在地における市街であった「玉造街」の存在をあげ、玉造塞比定地との共通性を指摘した。以上の考察を踏まえ、玉造塞が川度の小字「玉の木沢」付近に存する可能性が高いと考えたのである。

このように原は、フィールド調査に力点において玉造塞遺跡に関する精緻な歴史地理学的な研究を試みている。この研究手法は、この玉造塞遺跡に関する考察だけでなく、博士論文全般に通底する特徴といえる⁶²⁾。審査コメントでも、本研究を「歴史地理上実地考査の成績(略)其所説科学的なるを得又斬新なり」と高く評価している⁶³⁾。同時代の歴史地理学者であった河田 熊や吉田東伍も奥羽地方の歴史地理研究を行っているが、いずれも文献考証を中心とする研究⁶⁴⁾であったことを考慮すると、徹底した現地観察や遺跡調査、地名検証などに基づく原の研究は斬新な

存在であった。指導教官である坪井は、常日頃から実地調査の重要性を強調していたというが⁶⁵⁾、その影響が滲み出ている内容といえよう。フィールドを古代東北としたのも、一つには東北地域史に知見を有する坪井の影響があると考えられる⁶⁶⁾。もっとも、原の主張した玉造塞温泉村説は今日では支持されていない⁶⁷⁾。しかし、今日でも古代東北の城柵研究史に関わる記述の中で、原の説はしばしば引用される⁶⁸⁾。またその手法は、現在の歴史地理学研究にも通じるものがある。惜しむらくは全編の刊行がなされないまま震災で烏有に帰したことであり、仮に刊行されていれば当時の歴史地理学界へのインパクトは少なかつたと推測される。

以上、博士論文の内容についての検討を試みた。すでに述べたように、博士学位の取得までは論文作成に精力を傾けていた原だが、これ以降はそれまでの研究成果の発信に力を注ぐようになる。その一つが教育活動であり、もう一つは地名研究や歴史地図研究などの発表であった。以下において、まずは教育活動から検討することとしたい。

VI. 教育活動の展開

原の教育との関わりは、明治33(1900)年4月の郁文館中学より始まる。この月より郁文館中学の分館で「日本歴史」を講義し、翌34(1901)年9月からは郁文館内に設立された史学館にて「日本歴史地理」の講義を担任している。しかし本格的な教育活動は、先にも述べたように明治38年の学位取得以降であった。明治39(1906)年11月からは明治大学文学部で、同40(1907)年4月からは学習院女学部で、さらに同年9月からは國學院大學大学部予科で歴史や地理学、国史地理などを担当している。また、明治39年9月からは、当時早稲田大学が実施していた中等教育課程の通信教育で日本史の講師も務めていた。以下においては、就職の順に郁文館、明

治大学文学部、学習院女学部、國學院大學大学部での教育活動について考察し、最後に『早稲田中学講義』での日本史講義について触れることとした。

まず郁文館での活動であるが、すでに述べたように、原が勤務したのは中学校分館と史学館である⁶⁹⁾。郁文館は明治22(1889)年、27歳の青年教育家棚橋一郎により設立され、同32(1899)年に中学校令により私立中学郁文館となり、同年、分館が設置されている。またその前年の明治31年、本校内に史学館が開設された⁷⁰⁾。特に注目したいのはこの史学館である。同校は「尋常師範学校及尋常中学等の教員を養成する⁷¹⁾」ことを目的に設立された3年制の専門学校であり、坪井九馬三をはじめ東洋史の那珂通世、日本史の萩野由之、人類学・考古学の坪井正五郎などが講師を務めていた。明治35年頃には講師5名、生徒6名がいたという⁷²⁾。原が勤務したのは同34(1901)年9月からであるが、原が担当した「日本歴史地理」の内容や授業時間数、勤務年数などの詳細は、現在の郁文館に史学館関係の資料が残存していないため全く不明である⁷³⁾。原の影響を受けた生徒がいたかどうかも資料的制約のため分らない⁷⁴⁾。なお、この史学館は生徒不足からか長くは存置されなかったようであり、原の勤務年数も短かったと考えられる⁷⁵⁾。もう一つの中学校分館での勤務期間や教育内容についても、残念ながら資料がないため明らかにはできない⁷⁶⁾。

さて、明治38(1905)年11月に学位を取得した原は、翌39年11月より、「明治大学文科ニ於テ日本史講義ヲ担任⁷⁷⁾」した。明治大学に文学部が発足したのは明治39年9月であり、文学部発足とほぼ同時に講師に就任したことになる。しかし不思議なことに、この時期における同校の教育関連資料からは原の名前を見出すことができない。明治大学の『講師名簿』は明治42年以降しか残存しておらず、それ以前の状況は明確ではないが、少な

くとも同年以降の『講師名簿』に原の名前は見当たらない⁷⁸⁾。大学の機関誌であった『明治学報』の当時の講師に関する記事にも、同様に原の名前は見当たらない⁷⁹⁾。ただし同12月に文学部在學生により設立された「明治文学会」の教員賛助員に、原の名前が見える⁸⁰⁾ことから、講師の身分であったことは間違いないであろう。履歴書を見る限りは日本史を担当していたようであり、歴史地理学ではない。いずれにせよ資料的制約から、同大学でのその他の講義科目、勤務期間などの詳細は不明である。

続いて原は、明治40(1907)年4月、学習院女学部「歴史担任教師⁸¹⁾」として就職した。しかし翌41年3月には「私儀都合により辞任致度」と「辞任御願」を提出しており⁸²⁾、わずか1年で学習院での教員生活を切り上げている。当時学習院女学部では中学科、専修科などに歴史の授業を設けていたが⁸³⁾、どの課程を担当したのかは資料からは窺えない。その講義内容も全く不明である。

一方、明治40(1907)年9月からは國學院大學大学部予科で地理学の講義を担当した⁸⁴⁾。同43年9月からは、地理学に加えて国史地理の計2科目を担当するようになった⁸⁵⁾。ただしその詳細な内容を窺い知ることのできる資料は今日残されていない⁸⁶⁾。推測ではあるが、原は明治39年に『日本国史地図 附日本国史地理』を、明治43年には『新編国民地図分冊之上』を発刊していることから、この著作を教科書として使用したか、もしくはこの著作をベースに講義を行っていた可能性がある。大正元(1912)年になると各学科担当講師一覧には原の名前はなく、代わって藤田明が国史地理を担当している⁸⁷⁾。原は明治44(1911)年春より体調を崩して郷里で静養中であつた。しかし退職したのではなく、一時休職の状態であつたようである。大正2年に没した時に『國學院雑誌』に掲載された追悼文には「本大学講師文学博士原秀四郎氏」と記

されており、講師の身分のまま没したことが分かる⁸⁸⁾。藤田は、前にも述べたように日本歴史地理研究会の創立メンバーの一人であり、原の帝国大学の後輩でもあった。原は離京するにあたり、後輩の藤田をピンチヒッターとして推薦したとも考えられる。

原は「社交を好まず（中略）教授は其好む所にあらざりしが如く」⁸⁹⁾とあり、教育活動をあまり好まなかったようである。しかし、國學院大學では明治44（1911）年春までの約3年半継続的に講師を務めるとともに、明治42年11月に大学内に設立された「国史学会」に関与したり⁹⁰⁾、講師職員を招いた忘年会に参加したりする⁹¹⁾など、國學院には一定の思い入れがあったようである。国文学や歴史学を教育の中心に位置づける國學院の学風が、原の肌に馴染んだのであろうか⁹²⁾。

さて最後に、時期は前後するが、明治40（1907）年4月から担当した『早稲田中学講義』での日本史講義に触れることとしたい。この『早稲田中学講義』は早稲田大学の校外教育の一環として明治39年4月より開催された、2年課程の通信教育である⁹³⁾。いうまでもなく、これは原自身が早稲田中学の教壇に立って授業を行っていたわけではなく、あくまで講義録の執筆者であった⁹⁴⁾。明治40年から講師を務めたが、原の名は逝去後の大正3（1914）年10月開始の「中学講義学課及講師」にも記載されている。恐らく原が死去したのは2年間の課程の途中であったが、この講義録は毎年大幅な修訂をする必要がなかったことから、そのまま原の日本史講義が用いられたのであろう。なお、この講義録は、早稲田大学出版部から『日本史講義』として出版されている⁹⁵⁾。その内容を見ると、第一章に「地勢の概要」として、日本の地理と地域区分を地図を交えて解説しており、いかにも原らしい内容である。

以上、原の大学などでの講義科目、講義期間などについて概観した。原が歴史地理や地

理学を教えたのは、國學院大學と郁文館史学館の2校であった。しかしこの両校の受講者の中から歴史地理学者、地理学者が輩出した例は、管見の限りでは確認できなかった⁹⁶⁾。両校とも、恐らくは経営上の必要性から中等教員養成を教育の主眼に位置づけており、研究者養成を目指していなかったことも考慮する必要がある⁹⁷⁾。今後の調査を待たなければならぬが、原の学問的後継者は勤務校からは誕生しなかった可能性が高い。

次に博士学位取得後、教育活動と並行して展開していた研究活動に触れてみたい。

VII. 歴史地名の研究

原は大学院時代より地名研究に手を染めていた。明治32（1899）年には『歴史地理』第一巻に「地名研究の便法」「地名研究の方法」というエッセイ風短編を掲載している。同第三巻に掲載した「地名の解釈」という論考では、次のように述べている。

地名の解釈—随分困難なものである、中には到底その国語の知識では解釈のできぬ、ともすれば外国語などが交つて居る。（略）されど若し歴史の智識があるならば、忽ち氷解する一種類がある。（略）凡て地名は歴史地理研究の主要な材料であるのみならず、又此によりては当時の歴史を知る事が出来るのである⁹⁸⁾

（一部句点を読点にあらためた—筆者注）

原は地名研究にあたって日本語だけではなく、原のいうところの「外国語」であるアイヌ語をはじめ中国語や韓国語などを参照して地名の語源を解き明かそうとしている。特にアイヌ語から地名の語源を解明しようとする立場は、Ⅲ章でも触れた東京帝国大学の神保小虎の影響を受けたものと考えられる⁹⁹⁾。また、原にとって地名研究は、地名そのものの究明を目指しているというより、歴史地理学や歴史学の主要な研究材料と位置づけている点の特徴である¹⁰⁰⁾。

さて、原が本格的に地名研究の発表を始めたのは、明治39(1906)年9月に『地学雑誌』に掲載された「薩南海上に於ける地名研究の一節(一)」¹⁰¹⁾からである。原は、奄美大島および沖縄本島を中心に、島嶼の名称の語尾にR' m'やR' n'が付くものが多い点に着目した。波照間、嘉計呂麻、慶良間、与論などの語尾は、いずれR' m'ないしR' n'であり、遡れば平安時代の和歌にも詠まれた「ウルマ」の「ルマ」も、島嶼の義であるとする。この語尾は薩南海上のみならず、九州の一部、さらには朝鮮半島の島嶼にも存在することを指摘し、これが韓国語を語源とする古代地名である可能性を示唆した。加えて奄美大島には、仲勝、思勝、役勝などといった「K' ㄷ(カツ)」の語尾を有する地名が多いが、これは中国東北部や朝鮮半島などで「都邑」の意味で使用されている言葉と同語であると推断した。原は薩南海上の島嶼に残る古地名を研究することで、同じく歴史的に朝鮮半島や中国の影響を受けていた国内諸地域の「古代地名の意義」を推測できるとし、「以て所謂歴史地理の真相」¹⁰²⁾を明らかにできると述べている。

アイヌ語起源の地名に関する研究については、明治42(1909)年2月に『神社協会雑誌』に発表された「本邦の歴史名辞をアイヌによりて解明すること」がある¹⁰³⁾。原は古代東北の史蹟調査を進める過程で、アイヌ語に語源を有すると思われる地名や歴史的名辞に接した。例えば延喜式神名帳にある「理訓許段神社」^{りきんこたん}「和我叡登拳神社」^{わかえとこ}がそれである。これらはそれぞれアイヌ語に徴すれば「昇る処の村落」の社、「泉」の社の意味であり、古代における東北開拓時に、先住民族であるアイヌの神社をそのまま存置した結果、式内社として記載されたと考えた。

以上のように原は、アイヌ語や韓国語などに起源を求めて地名の解釈をし、それに基づいて歴史地理や歴史を解明しようと試みた。

特に東北や薩南地方といった歴史時代の「辺境」の地名に着目したのは、古語や古地名が「島嶼だとか辺鄙だとかに残って居る」¹⁰⁴⁾からであり、それが歴史地理や日本古代史などの研究に資すると考えていたからであった。「辺境」に古語が残るという発想は、後に民俗学者の柳田国男が提唱した「方言圏論」¹⁰⁵⁾に通じるものがある。もっとも柳田自身は原の論考には全く言及しておらず、その考えを把握していたかどうかは不明である¹⁰⁶⁾。原の研究は同時代の研究において引用されたケースもあるが¹⁰⁷⁾、地名研究の進展にどの程度影響を与えたかについては、今後の調査に委ねたい。

VIII. 『日本国史地図 附日本国史地理』の特色

地名研究は原のライフワークであったが、それ以上に心血を注いだのは、歴史地図の研究と発表であった。明治39(1906)年に刊行した『日本国史地図 附日本国史地理』をはじめ、同40(1907)年刊行の『中等国史地図』、および同43(1910)年刊行の『新編国民地図分冊之上』などがある。ここでは特に、原の代表作である『日本国史地図 附日本国史地理』に焦点をあてて検討を進めたい。

この『日本国史地図 附日本国史地理』は、冒頭に「本書は国史地図纂を節約せる日本国史地図と其解説たる日本国史地理とを合編せるものなり」¹⁰⁸⁾と記されているように、「国史地図纂」という地図集を要約した「日本国史地図」と、その解説である「日本国史地理」とで構成されている。ちなみに「国史地図纂」とは、すでに述べたように博士論文の副論文である。またその読者層については、「専ら中等程度の読史社会に参考書又は教科書を供する目的を以て述作せるもの」¹⁰⁹⁾としているように、中学校や高等女学校、師範学校といった中等学校の生徒が対象であった。同時に原は「本書はまた単独に一般読書社会に歴史地理の趣味を普及せしめんとする目的を有せ

り¹¹⁰⁾とも述べており、知識層に歴史地理への関心を広めることも狙っていたようである。

この書はタイトルの通り「日本国史地図」がメインの位置づけではあるが、構成上は、解説である附属の「日本国史地理」が前半に配置されている。そこでまずは、「日本国史地理」の検討から入ることとしたい。

「日本国史地理」の内容は、表3にあるように「序説（文明史要）」「年代対照」「図書集覧」「第一部 地理分叙」「第二部 歴史地理」「通観（風土記要）」「日本中域国別人口表附都会人口表」「索引」で構成される。まず序説では、世界史における四大文明およびギリシャ・ローマ文明の発展と伝播などを略述し、その上で特に中国史、ヨーロッパ史と日本史と関わりを概観している。第一部では主にわが国の平野や河川、丘陵、山岳などの自然的基礎を解説し、第二部では「上代紀」から「現代紀」までの歴史地理を、特に産業面、対外交渉面に注意を払いつつ論述している。最後の通観では、当時の日本の版図を現代地理における通常の地域区分に従って北域（「北海道及び樺太南半」）・中域（「本土四国九州及び附属諸島」）・南域（「沖縄及び台湾及び所属諸島」）の3地域に区分し、さらに中域を、歴史地理的な観点から独自に歴史地理幹線部分（関東・海道・近畿・瀬戸内海・筑紫）、歴史地理幹線以北（出羽・陸奥・信越・前越・中国外洋）、歴史地理幹線以南（四国外洋・薩隅日¹¹¹⁾）に3分類している。

「日本国史地理」の最大の特徴は、一人の手になる初の日本歴史地理概説である点であろう。原自身もこの「日本国史地理」を、地図の解説のみならず「各時代に於ける地理事項の説明」を目的の一つとしていた¹¹²⁾。この後、一人の研究者による概説書の発刊は、昭和59（1984）年の菊地利夫『日本歴史地理概説』まで待たなければならない¹¹³⁾。加えて特徴的なのは、独自の歴史地理的な地域区分である。北域・中域・南域は現代地理の地

域区分に倣ったとしているが¹¹⁴⁾、中域の3区分については歴史地理の視点に基づくものであり、斬新な試みとして注目に値する。

続いて本書の核となる「日本国史地図」の検討に入りたい。「日本国史地図」は26面150枚の地図類で構成されるもので、上代から現代までの様々な歴史地図を掲載している。その特徴は大きく二つ指摘できる。まず1点目は、地形の描出に意を注いでいる点である。この点、原は「地形の描出に就ては頗る苦心する所ありし（略）従来流布する地図の全く地形を遺却せるものに比して纔かに一步進めたり¹¹⁵⁾」と自信をのぞかせている。具体的には山地・台地を緑色で示し、平野や山間盆地・支谷などは白地とした。2点目としては、従来の歴史地図帳が主眼としてきた政治区画や史跡に関わる地図に加え、産業、対外交渉に関わる事跡を記した地図を少なからず収録していることである¹¹⁶⁾。例えば産業に関わる地図としては「山城条里（王朝生産）」「開墾進歩（武家前紀）」「農工商業現状（現代）」、対外交渉に関わる地図としては「大陸事情（王朝生産）」「十五六世紀強国（武家後紀）」「日本通商貿易系統（現代）」などがある。この点はいうまでもなく解説編である「日本国史地理」の記述にも反映されている。

さてこの書は、歴史地理学界はもとより地理学界、歴史学界から高い評価をもって迎えられた。『歴史地理』では、喜田貞吉が「読書界の渴を医するの効ありしを疑わず¹¹⁷⁾」と賛辞を送り、別の評者も「我が歴史地理学界に於ては前古比類なきの大著述」、「歴史地理学及び一般国史研鑽者の必読すべきの大著述¹¹⁸⁾」と文字通り絶賛している。『地学雑誌』は、本書の構成を略記した後、「本書の特色は（略）真正の意義に於ける歴史地理上の現今日本の地位と、其由りて来れる発達の徑路を示さんと勉めたるに在りとす」とし、「吾人は本書に於て初めて真の歴史地図を得た

表3 『日本国史地図 附日本国史地理』の概要

【日本国史地理】	【日本国史地図】
序説(文明序説)	巻首図画
年代対照	地図(暈滯式・曲線式・混合式・本書用式)・絵画(新古俯瞰式・臨写式)
図書集覧	第一部 地理分叙
第一部 地理分叙	第一面(地理汎論)
第一章 地理汎論	日本中城山脈・山河原野・耕地分布・陸前耕地・肥後耕地
山脈通路・原野耕地	第二面(地理各論)
第二章 地理各論	陸奥・武蔵・伊丹・今治・磐梯火山・利根川・鳥取・沼垂・相模・備讃海峡・吉野川
平地丘陵・山岳河海	第二部 歴史地理
第二部 歴史地理	第三面(古代史誌)
第一篇 上代紀	亜欧大陸人種及言語系統・東洋地理民族興亡・東方古代地理・本邦神代地理・倭附近
第三章 東方史誌	第四面(氏族時代)
言語地理(史上人種)・東方古史(漢胡二種)・半島古史(韓種動揺)・上代地理(建国史略)	国土拡張氏族蔓延・筑紫・難波附近・飛鳥京・倭諸京及氏族本居・西藩諸国
第四章 氏族時代	第五面(王朝時代)
氏族蔓延(地名起源)・国土拡張(国号制定)	国郡制度・畿内近傍・平城京・南島服属・蝦夷征伐
第二篇 王朝紀	第六面(平安京)
第五章 王朝国郡	平安京・平安京郊外・廓城沿革・大内裏内裏
京師諸国(地方名称)・蝦夷南島(拓殖要史)	第七面(王朝生産)
第六章 平安京	王朝生産・耕地分布・常陸拓殖・伊予郡郷・山城条里・肥前条里・大陸事情
第七章 王朝生産	第八面(源平迭興時代)
産業事蹟(拓殖方式)・大陸交通(文芸宗教)	東国北国・西国航路・陸奥出羽
第八章 源平迭興(武門起源)	第九面(鎌倉時代)
第三篇 武家前紀	守護地頭・伊豆相模・鎌倉・筑紫・博多附近
第九章 鎌倉時代(内治外交)	第十面(南北朝)
制度因襲・国民意気(元寇倭寇)	南北分争・陸奥・関東・近畿・九州
第十章 南北分争	第十一面(室町時代)
第十一章 守護制度	守護制度・関東騒乱・京都郊外・豪族興亡・応仁乱与党
第十二章 戦国時代(群雄割拠)	第十二面(戦国時代)
第十三章 織豊二氏	群雄割拠
第十四章 武家前紀生産	第十三面(織豊二氏時代)
耕地物産・貿易事情(通商要津)	織豊二氏覇業・安土附近・桶狭間附近・高松附近・小牧附近
第四篇 武家後紀	第十四面(武家前紀)
第十五章 豊臣時代	武家前紀生産・開墾進歩・堺・兵庫・博多
第十六章 武家後紀(外交)	第十五面(豊臣時代)
外征事蹟(技術改良)・海外交通(西欧文物入来)其一・海外交通(文学進歩)其二	大阪城・関ヶ原附近・伏見・小田原
第十七章 徳川時代内治	第十六面(武家後紀)
第十八章 徳川時代生産	文禄征韓役・北韓辺境・九州・長崎・平戸・東洋諸国・仙台附近・南韓海上・原口津・名護屋・十五六世紀強国・南欧諸国
物産分布／沿海航路・耕地分布／新田開発	第十七面(徳川時代)
第十九章 徳川時代外交	徳川大名・江戸市街・京都市街・禁裡仙洞御所・大阪市街
海外事情・辺土沿革	第十八面(徳川時代)
第五篇 現代紀	武家後紀生産・徳川時代末耕地分布・北海漁業・鏡野開墾・山田野地・葛日堰
第二十章 府県制度	第十九面(徳川時代)
第二十一章 対清露役	北方強隣・南海漂流・蝦夷開拓・鳥島・小笠原島・樺太事情・台湾沿革・台北附近・澎湖島・十七八九世紀世界強国領土
第二十二章 生産現状(規模変更)	第二十面(現代)
第二十三章 現代外交(世界大勢)	府県制度・開拓使・琉球藩・伏見役・鳥羽役・函館役・東北役・西南役
通観(風土記要)	第二十一面(現代)
日本中城国別人口表 附都会人口表	対清露役戦局・東洋海面・平壤・旅順附近・旅順要塞・威海衛・白河・北京・遼陽沙河奉天・遼陽城外・対馬海峡・竹島附近
日本国史地理索引(日本国史地図解説事件別索引)	第二十二面(現代)
	農工商業現状(中城北海道)・石川県耕地整理・北海道屯田兵村・帯広新区画地・樺太漁場・韓国経営
	第二十三面(現代)
	世界通商殖民系統・日本通商貿易系統・日英同盟
	附録
	亜欧大陸文明系統宗教分布・世界交通系統・文物人種移動史蹟・日本版図沿革・文物入来経路・日本中城平野大勢・道路系統・史蹟発現要地
	日本国史地図地方別索引

注)本書は目次と本文(地図)との間で項目名・図面名に一部食い違いがあるが、ここではすべて本文(地図)の記載に従った。

る¹¹⁹⁾と高く評価している。ちなみにこの紹介文の筆者はペンネーム「零丁」、すなわち小川琢治である¹²⁰⁾。『史学雑誌』においても、「世の好史家が之によりて蒙を啓くこと得るを多きは、著者が質実なる積年の効蹟によるものと多謝すべきなり¹²¹⁾」と評価している。

しかし一方で、本書に対しては批判もあった。『歴史地理』のある投稿者は、せっかく著者が苦心して作図したものの地図そのものへの注記が不十分なため、「どの図もどの図も読者の疑問を生ずるの種になって居る」、「図学の幼稚な僕等には説明できぬ」と嘆き、本書は中等学校レベルには高度すぎて使用に耐えない、としている。また地図表記が不明で、例えば「鎌倉」の図では小さな地図に地名を書き込みすぎて、判読が困難との指摘もあった¹²²⁾。また、記述や地図に原の独自の学説を盛り込んだことで、抵抗を感じた研究者もいたようである¹²³⁾。

『日本国史地図 附日本国史地理』は、原が全く新しい試みに取り組んだ、画期的な学術書・教育参考書であった。その意味では原の代表作ともいえる。しかしすでに指摘したように、中等教育の現場では使用が困難なレベルの内容であり、原が意図した中等教育界での普及には至らなかったと推測される。研究者の間でも、発売当初はともかく、他の歴史地図に代わる決定版的な存在にはなりえなかったようである。版を重ねることなく初版で終了したことが、それを物語っている。同時代に刊行された吉田東伍らの『沿革考証日本読史地図』が改訂を重ね、昭和10年代まで継続的に刊行された¹²⁴⁾ことと比較すると、短命の書物であった。

以上、『日本国史地図 附日本国史地理』について、その特色や同時代評などを検討したが、それ以外の原の歴史地図帳についても簡単に触れたい。明治40(1907)年発刊の『中等国史地図』は、『日本国史地図 附日本

国史地理』をより簡約化した、中等学校向け歴史地図帳である¹²⁵⁾。『日本国史地図 附日本国史地理』の地図表記に対する批判を受けて、かなり明瞭な表記・表現へと修正が加えられている。明治43(1910)年の『新編国民地図 分冊之上』は、原が所属していた東亜協会の第一回夏期講習会における講演「日本地理概説(主として国文国史上の地理)」のなかの地図をまとめたものである¹²⁶⁾。その後、同『分冊之下』も刊行する予定であったが、結果的には未刊に終わっている¹²⁷⁾。

IX. 郷土誌の研究と最期

原は長く慢性腎臓炎を患っており、いったん治癒した後も「余命長からざるを自知」し、家を弟に譲り¹²⁸⁾、世事を離れて学問研究に没頭していた。明治44(1911)年の春になると持病が再発し、このため東京を去って波止浜で静養することとなった¹²⁹⁾。しかし当時としては数少ない東京帝国大学卒の文学博士の帰省とあって、ゆっくりとした静養は許されなかったようである。同年8月、青年有志の会である「羅漢会」に依頼されて「越智郡内郷土誌材に就いて」という講演を、さらに9月に今治において「本邦城郭の変遷発達」と題する講演を行なっている¹³⁰⁾。また時期は不明であるが、波止浜小学校で「海の話」という講演も実施している¹³¹⁾。

このうち、「越智郡内郷土誌材に就いて」は「将来郷土誌の研究に際して材料となり或は参考¹³²⁾」となることを期して行なったものであった。講演内容は、越智郡の先史・原史時代から奈良・平安時代の地方政治や条里制、近世の城郭や寺院などにわたる予定であったが、熱をこめて講演するあまり奈良・平安時代までで所定の時間の過半を費やし、近世については駆け足で言及するに留まった。聴衆は数百人、朝8時より夕方7時まで及ぶ、長時間の大講演会であった¹³³⁾。原の郷土誌は歴史地理そのものであり、博士主

論文「王朝時代東北地方拓殖二関スル史蹟ノ研究」と同様、地形・地質をはじめ地名、古物、遺跡などを重要視した研究を行っている¹³⁴⁾。この内容は地元の郷土史家には印象に残るものであったらしく、玉田栄二郎は「当地の郷土史調査に対して、種々なるヒントを得た」¹³⁵⁾と後に記している。

原はこの講演録に加え、その後に起稿した「越智郡内郷土誌材追加記録文書及び略記」や「本邦城郭の変遷発達」「海の話」の筆記録など7編を一書にまとめ、『七草』と題して出版するつもりであったという¹³⁶⁾。結局生前にこの構想は実現せず、逝去ほどない大正3(1914)年に、まずは講演録「越智郡内郷土誌材に就いて」が『越智郡郷土誌材』として刊行された¹³⁷⁾。次いで昭和4(1929)年に、同じ「越智郡郷土誌材」という書名で、前出の「越智郡内郷土誌材に就いて」に加えて「越智郡内郷土誌材追加記録文書及び略記」、「本邦城郭の変遷発達」の計3編を収めた別の書物が新たに刊行されている¹³⁸⁾。

郷里で静養したものの、原の病状はその後も回復することはなかった。ついに大正2(1913)年3月2日、後事を諸弟に託して永眠した。享年42歳という若さであった。原逝去の報を受け、『歴史地理』や『史学雑誌』『國學院雑誌』『東亜の光』『学士会月報』などが追悼文を掲載した。『歴史地理』は「嗚呼氏の如きは実に学に終始したるの人、而も之を世に施すこと少なく、中道にして空しく長逝せらる」¹³⁹⁾と記してその死を悼んでいる。博士論文・副論文をはじめ、原が生前に出版を予告していた『國史地図纂』や『日本国史地理備攷』、『日本国史地名辞典』、『新編国民地図 分冊之下』などは、ついに発表することなく終わった¹⁴⁰⁾。

X. おわりに

以上、原 秀四郎の学問とその生涯を、伝記書誌アプローチに基づき明らかにしてきた。

雑誌『歴史地理』に代表される明治期の歴史地理学は、従来しばしば史学の補助学を志向したとしてマイナーに評価されてきたが¹⁴¹⁾、原の歴史地理学は、史学の補助学の域を大きく超えており、むしろ今日の歴史地理学の方法や手法と共通する点が見られることが明らかとなった。筆者は以前、日本歴史地理研究会を設立した主要メンバーの意図は、史学の補助学ではなくむしろ地理学としての歴史地理学の確立を目指していたことを論じた¹⁴²⁾。原の歴史地理学も、まさにその方向性と軌を一にする。ただ、喜田貞吉ら他のメンバーに比べて、原の研究は地理学研究という点でより徹底している印象がある。博士主論文に見られる、現地での地形観察や地名調査に基づく精緻な立論、さらに『日本国史地図 附日本国史地理』における地図表現への強いこだわりといった地理学的思考は、他のメンバーを凌ぐものがあると思われる。

原の研究は、当時の歴史地理学はもとより地理学、史学の各分野から大きな評価を受けていた。ただ惜しむらくは、博士論文をはじめ、原が刊行を宣言していた『國史地図纂』や『日本国史地理備攷』、『日本国史地名辞典』などといった歴史地理関係の原稿が、未公刊に終わった点である。『歴史地理』に掲載された追悼文にも「学位論文を始として多年蘊蓄せられたる所も多くは之を発表せらるゝことなく(中略)氏の遺稿が整理せられ、世に発表せらるゝあらば、以て学界を益すること少なからざるべく」¹⁴³⁾とあるように、これらの原稿が世に出ていれば、地理学界からの注目度も変わっていたに違いない。かつ、原は大学において長く教鞭をとることもなく、管見の限りでは学問の後継者もいなかった。今日、地理学界において原の名がほぼ完全に忘れ去られたのは、以上のような要因が少なからず影響していると推測される。

さて近年、明治から戦前期を対象とする地理学史研究がかつてない活況を見せている

が、「いまだ広大な未開拓地」¹⁴⁴⁾が広がっているのも事実である。明治期の歴史地理学についても同様であり、再評価の余地が大きいと考えられる。今後、この分野の学史研究を着実に蓄積していくことで、その全体像を浮き彫りにしていく必要がある。

(日本たばこ産業(株))

【付記】

本稿作成に際し、原 秀四郎の弟真十郎の孫にあたる原 晃一氏(原印刷株取締役相談役)には、所蔵の遺稿を閲覧させていただくとともに貴重なご教示を賜りました。また学習院院史資料室の花田裕子氏をはじめ、早稲田大学大学史資料センターの荒船俊太郎氏、明治大学史資料センターの村松玄太氏、國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンターの益井邦夫氏、郁文館夢学園総務課の木内真知子氏には多大なるご協力を賜りました。この場をかりて厚く御礼申し上げます。

【注】

- 1) ①「文学博士原秀四郎君の逝去を悼む」、歴史地理21-4, 1913, 412~413頁, ②三宅千代二「故文学博士 原秀四郎君略伝」(原秀四郎『越智郡郷土誌材』, 渦潮社, 1929), 1~3頁。なお、『学位大系博士録 昭和十五・六年版』の「文学博士」の項を見ると、原の学位取得は明治38(1905)年11月18日で、専門学科は「地理歴史」となっている。歴史関連の専門学科名を見ると「国史」「西洋史」「東洋史」「経済史」「古代史」などのようにある程度分野が分かれていることから、この「地理歴史」は広く地理・歴史全般を示す言葉ではなく、地理と歴史の双方に関わる特定の学問領域、といった意味で使用していると思われる。原の学位論文の内容から判断すると、「地理歴史」は歴史地理を含意すると判断して間違いないと考えられる。なお、「地理歴史」で学位(旧学位令に基づく文学博士)を取得したのは、原以前には皆無で、原以後には吉田東伍一人のみである。吉田は、明治42(1909)

- 年7月24日に学位を取得している。井関九郎監修『学位大系博士録 昭和十五・六年版』, 発展社, 1940, 「文学博士」1~4頁。
- 2) ①「(新着梗概) 日本国史地図 附日本国史地理」, 史学雑誌17-9, 1906, 986~988頁, ②零丁「(新刊紹介) 日本読史地図 附日本国史地図」, 地学雑誌214, 1906, 720頁, ③「日本国史地図につきて」, 歴史地理9-1, 1907, 64~66頁など。
 - 3) この「忘れ去られた」という表現は、島津が明治の地理学者である河田 熊や河井庫太郎に対して使用した表現を借用した。①島津俊之「河田 熊の地理思想と実践—近世と近代のはざままで—」, 人文地理56-4, 2004, 331頁, ②同「河井庫太郎と未完の『大日本府県志』—吉田東伍になり損ねた男—」, 空間・社会・地理思想10, 2006, 38頁。
 - 4) 中川浩一「明治の地理学史」, 人文地理27-5, 1975, 512頁。
 - 5) 山田安彦『古代東北のフロンティア』, 古今書院, 1976, 44頁の注121)。
 - 6) 原は日本史あるいは考古学の分野では辞典類で取り上げられており、その存在は今日でも認知されている。とはいえ、これまでその研究史において必ずしも注目されてきたとはいえない。日本歴史学会編『日本史研究者辞典』, 吉川弘文館, 1999, 265頁, 斎藤 忠『日本考古学史辞典』, 東京堂出版, 1984, 470頁, 斎藤 忠編『日本考古学人物事典』, 学生社, 2006, 197頁。
 - 7) ①岡田俊裕『近現代日本地理学思想史—個人史的研究』, 古今書院, 1992, ②同『日本地理学史論』, 古今書院, 2000, ③同『地理学史—人物と論争—』, 古今書院, 2002, ④石田 寛「中目 覚と広島高等師範学校」, 地理44-11, 1999, 48~55頁, ⑤千田 稔『地名の巨人 吉田東伍—大日本地名辞書の誕生—』, 角川書店, 2003, 240頁, ⑥前掲3) ①331~350頁, ⑦川合一郎「吉田東伍の歴史地理学とその後継者」, 歴史地理学47-2, 2005, 24~41頁, ⑧柴田陽一「小牧実繁の「日本地政学」とその思想的確立—個人史的側面に注目して—」, 人文地理58-1, 2006, 1~19頁など。

- 8) 前掲7) ⑤。
- 9) 前掲3) ①331～350頁。
- 10) 前掲3) ②50頁の注7) を参照。
- 11) 原家は江戸時代から続く塩問屋(屋号「来島屋」)で塩田も所有していた。武一郎には、秀四郎を筆頭に七男五女がいた。明治38(1905)年の塩専売制施行に伴い塩問屋は廃業となり、しばらくは塩田経営で生計を立てていたようであるが、明治42年に秀四郎の弟で四男の真十郎が出版業を創業し、「原印刷株式会社」として現在に至っている。真十郎の孫にあたる原 晃一氏(原印刷(株)取締役相談役)からの聞き取りによる。
- 12) 大学までの経歴については、主に以下の資料・文献に依拠して記述した。①「履歴書」、『華族女学校・学女 明治三九年同四十年 進退録』、学習院院史資料室所蔵、②本多辰次郎「故文学博士原 秀四郎君を憶ふ」、学会月報306, 1913, ③前掲1) ②1頁。なお、原が在籍した学校(中学校以上)の当時の正式名称については、以下の文献により確認した。④松山東高校百年史編集委員会編『愛媛県立松山東高等学校百年史』、愛媛県立松山東高等学校, 1978, 179～192頁, ⑤京都大学百年史編集委員会編『京都大学百年史 総説編』、京都大学後援会, 1998, 70～94頁, ⑥東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 通史1』、東京大学, 1984, 989～993頁, ⑦東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史 部局史1』、東京大学, 1986, 418～421頁。大学入学年に関しては『帝国大学一覧 従明治二十八年 至明治二十九年』、帝国大学, 1896, 346～347頁の「文科大学学生生徒 国史科」で確認した。
- 13) ①「文科大学歴史講座」, 史学雑誌7-4, 1896, 340頁, ②「文科大学歴史講座」, 史学雑誌7-11, 1896, 1045頁。
- 14) 大森金五郎「栗里栗田寛先生の事蹟」, 中央史壇13-9, 1927, 11～24頁。
- 15) 原 秀四郎『日本国史地図 附日本国史地理』, 博文館, 1906, 「日本国史地図」凡例7頁。
- 16) 文科大学では、外国人歴史教師ルードウィヒ・リースも地理学を教えていた。リースは明治21(1888)年以降、史学科で地文学や歴史地理の授業を行っており、同年11月の国史科増設に際し「日本ノ史学的地理学」の講義の必要性を主張した人物であった。「文科大学歴史講座」, 史学雑誌9-11, 1898, 995頁, 東京大学史史料研究会『東京大学年報 第6巻』, 東京大学出版会, 1994, 360頁, 前掲3) ①344頁など。文科大学で地理学関連の講義をしたという点では、リースは坪井に先んじている。しかしリースの地理学の講義は、少なくとも原の在学期間においては史学科のみで開講され、原の在籍した国史科では行われていない。このため、どの程度リースが原に影響を与えたのかは不明といわざるをえない。
- 17) 吉田敏弘「史学地理学講座における近代人文地理学導入の系譜」(京都大学文学部地理学教室編『地理の思想』, 地人書房, 1982), 192～205頁。
- 18) 「坪井文学博士の薨去」, 歴史地理67-3, 1936, 310～311頁。
- 19) 坪井が明治24(1891)年より史学科・国史科の学生対象に実施した「史学研究法」の講義は、地理学を含む内容であったと考えられる。明治32(1899)年秋に「史学研究法」を受講した柴 謙太郎は、その講義の内容が「西洋古文書学の梗概, 史学と地理学, 史学と経済学との関係など」であったと回想している。柴 謙太郎「故坪井先生の歴史地理学と南洋史学」, 経済史研究を偲ぶ(一), 歴史地理67-4, 1936, 410～411頁。また、講義と同名の著書『史学研究法』でも歴史地理学や政治地理学が取り上げられており、坪井にとって史学と地理学は密接な関係にあった。坪井九馬三『訂正再版史学研究法』, 早稲田大学出版部, 1903。
- 20) 「文科大学に於ける歴史の新講義」, 史学雑誌11-10, 1900, 1264頁, 前掲12) ⑦420頁。
- 21) 原の文科大学在学中は、坪井の「史学研究法」は史学1年, 国史3年に割り当てられていた。前掲13) ①341頁, 前掲13) ②1046頁。

- 22) 川合一郎「明治・大正期における雑誌『歴史地理』—同時代の研究者による評価を中心に—」, 歴史地理学48-4, 2006, 26~27頁。
- 23) 「修学旅行報告」, 史学雑誌9-11, 1898, 979頁。
- 24) 「文科大学国史史学卒業生」, 史学雑誌9-8, 1898, 721頁, 前掲1) ②1頁, 前掲12) ①。なお, 帝国大学は, 明治30(1897)年6月の京都帝国大学の設立に伴って東京帝国大学と改称した。従って原の入学時は帝国大学であったが, 卒業時には東京帝国大学と改称されていた。
- 25) 「大学院入学者」, 史学雑誌9-10, 1898, 888~889頁, 前掲1) ②1頁, 前掲12) ①。
- 26) 喜田の大学院研究テーマは「本邦歴史地理特に畿内地方」であった。「大学院入学生」, 史学雑誌7-9, 1896, 848頁。
- 27) 前掲1) ②2頁。原は『日本国史地図 附日本国史地理』の序言で, 実地調査の方法や着眼点などに関する研究指導を受けた教官として, 坪井の名を先頭に挙げている。前掲15)「日本国史地図」凡例7頁。
- 28) 「明治四十二年夏季東亜協会主催 日本地理(主として国文国史上の地理)概説講習用原稿(一)」(手稿), 原家所蔵。このなかで原は, 地理学を大きく分けて自然地理学と人事地理学とし, 自然地理学を数理地理学(地球星学, 天文地理学), 地球形態学(地文学), 気象地理学(気界地理学), 生物地理学に分類し, 人事地理学を人類地理学, 政治地理学, 歴史地理学, 経済地理学に分類している。その他の地理学として殖民地地理, 戦事地理, 医学地理などを挙げている。地理学の分類そのものは, 坪井の分類(数理地理学, 物理地理学, 物産地理学, 歴史地理学, 政治地理学)とは異なり, 明治40(1907)年に発行された山上万次郎『日本帝国政治地理 第一巻』, 大日本図書, 1907, 17頁所載の分類表にはほぼ一致していることから, この書に基づいたと思われる。
- 29) 坪井九馬三「歴史地理とは何ぞや」, 歴史地理2-9, 1900, 641頁。
- 30) 前掲1) ②1頁。
- 31) 『東京帝国大学一覽 従明治三十一年 至明治三十二年』, 東京帝国大学, 1898, 228~230頁。
- 32) このうち神保小虎は, 原の『日本国史地図 附日本国史地理』に題詞を寄せるなど, 特に関係が深かったと思われる。前掲15) 題詞。
- 33) 原 秀四郎「古墳研究に就ての綱目を示す表」, 考古1-1, 1900, 17頁には, 古墳研究の項目を整理した表について「坪井理学博士の添削を請ひました」とある。
- 34) 「黑板, 原, 高瀬の三博士」, 史学雑誌16-12, 1905, 1205頁。
- 35) 石橋の大学院での担当教官は資料上では不明であるが, 大学院の研究テーマが「政治地理学」であったことを考慮すると, 地理学に明るい坪井が指導教授の一人であったと見なして間違いのないであろう。石橋の大学院入学年およびテーマは, 「大学院入学者」, 史学雑誌12-10, 1901, 1238頁を参照。
- 36) 「日本歴史地理研究会設立趣意書」, 歴史地理1-1, 1899。
- 37) 喜田貞吉『六十年の回顧』(同『喜田貞吉著作集14』, 平凡社, 1982), 94~95頁。なお, 喜田の別の回顧によると, 当初より大森金五郎, 岡部精一もメンバーに加わっていた。喜田貞吉「本会三十年の回顧」, 歴史地理54-6, 1929, 637頁。
- 38) 堀田璋左右「本会に関する懐旧談」, 歴史地理54-6, 1929, 647頁。
- 39) 「日本歴史地理研究会」, 史学雑誌10-5, 1899, 524頁。
- 40) 例えば, 原が最後に論文を掲載した第14巻第1号までに, 喜田は133本の論文を掲載している。
- 41) 岡部精一「日本歴史地理学会十年史」, 歴史地理14-1, 1909, 3頁。なお, 明治35(1902)年1月発行の『歴史地理』第4巻第1号巻頭の新年挨拶には, 他の幹事・顧問と並んで「顧問 原 秀四郎」とあり, 会から完全に手を引いていたわけではないようである。しかしこの「顧問」は, 会の規約によれば「顧問は発起人を以て之に充て(略)」

- とあるように、発起人がほぼ自動的に就任するものであったようであり、必ずしも何らかの責務や仕事を伴うものではなかったと思われる。「日本歴史地理研究会規約（明治三十三年五月改正）」、歴史地理2-2, 1900, 奥付。
- 42) こ, 志, 「日本歴史地理の研究に就いて」, 歴史地理1-1, 1899, 28頁。「こ, 志,」は, 小林庄次郎の姓と名の頭文字をとったペンネームである。
- 43) 前掲22) 28~29頁。
- 44) 「文学博士原秀四郎君の逝去を悼む」, 歴史地理21-4, 1913, 412頁。
- 45) 前掲1) ②2頁。
- 46) 前掲1) の『学位大系博士録 昭和十五・六年版』に関する記述を参照。
- 47) 前掲12) ①。
- 48) 片山市太郎編『吉備公遺蹟誌』, 吉備保光会, 1926, 116頁。
- 49) 原稿のタイトルは「岡山県小田郡三谷村及び吉備郡箭田村に於ける古墳墓の研究(紀事)」であるが, 明治44(1911)年3月に「下道吉備氏墓域考(一名岡山縣小田郡三谷村古墳墓調査報告)」と訂正されている。原稿(手稿)は原家所蔵。
- 50) 二間四面堂主人「研究旅行(一)」, 史学界6-6, 1904, 685~700頁。なお, 二間四面堂主人は原のペンネームである。前掲15)「日本国史地理」正誤表3頁の余白に, このペンネームの由来が原の書齋であることが書かれている。
- 51) 原家には明治38(1905)年と記載のある「国史地図纂 解説補足」(手稿)が遺存しているが, 本文や地図類は残っていない。
- 52) 「王朝時代東北地方拓殖に関する史蹟の研究(第二次草稿)」第一冊・第二冊・第三冊・第五冊(手稿), 原家所蔵。なお, 残念ながら第四冊は残存していない。
- 53) 前掲52) 第一冊から引用。
- 54) 本論文では古代東北の条里についてあまり触れていないが, 研究目的にある「平野郊沢の如何に開拓されしや」を明らかにするには, 条里遺構への考察は重要であると考えられる。本研究の問題点でもあろう。
- 55) 前掲52) 第五冊から引用。
- 56) 原家所蔵の原稿には62図と記載されているが, 審査コメントには62図とある。なお, 地図そのものは原家にも残されていない。
- 57) 前掲52) 第三冊から引用。
- 58) 原 秀四郎「玉造塞趾に就きて」, 史学雑誌19-8, 1908, 巻頭附図2, 803~831頁。
- 59) 大槻文彦「古奥旧地考摘録」, 歴史地理3-7, 1901, 497頁。
- 60) 以下の玉造塞に関する記述は, 前掲52) 第三冊所収の「玉造」に基づく。
- 61) 吉田東伍『増補 大日本地名辞書 第七卷』, 富山房, 1970, 462頁(玉作柵址)。
- 62) 博士主論文の審査コメントには, 玉造塞の他にも宮城郷や胆沢城, 伊治城, 雄勝柵の比定地などに関する実証的な検証を「証拠十分」「有力な学説を立てたるの例」「参考すべき価値ある新説」などと評価している。前掲34) 1205頁。
- 63) 前掲34) 1204~1205頁。
- 64) 例えば以下の文献がある。河田 巖「奥羽地理沿革考」, 史学雑誌5-7, 1894, 588~608頁, 同5-11, 1894, 881~906頁, 同5-12, 1894, 977~990頁, 同6-2, 1895, 121~134頁, 吉田東伍「東北辺土の沿革」, 史学雑誌5-7, 1894, 567~579頁, 同5-8, 1894, 644~659頁, 同5-9, 1894, 727~733頁, 同5-10, 1894, 802~815頁。なお原は, 汎論第三章の史料の「図書」の項で, 先行研究として河田の「奥羽地理沿革考」や、『東京地学協会報告』に掲載された塚本明毅の「日本国郡沿革考」などを挙げている。これらの論考への論評はないものの, 研究に際してそれらを参考にしたものと考えられる。
- 65) 喜田貞吉は坪井について「先生はかねて自分に対して, 歴史地理を修めるには実地の踏査が何よりも必要だとの事を頻りに言はれる」と回想している。喜田貞吉「坪井先生の追憶」, 歴史地理67-4, 1936, 405頁。原に対しても同様の指導がなされていたと推測される。
- 66) 坪井は, 大槻文彦に宛てた書簡(年代不詳)のなかで「玉造」の地名などに関する考証

- を行なっており、古代東北への関心の高さを窺わせる。斎藤 忠『書簡等からみた史学・考古学の先覚』、雄山閣出版、1998、35～37頁。また坪井は、明治28（1895）年に設立された奥羽史学会の会員でもあった。「奥羽史学会々員住所姓名簿」、奥羽史学会会報1、1895、76頁。
- 67) 柳澤和明「『玉造柵』から『玉造塞』への名称変更とその比定遺跡一名生館官衙遺跡IV期から宮沢遺跡への移転」、宮城考古学9、2007、135～154頁。なお、柳澤は本論文で誤って「原秀三郎」と記している。
- 68) 宮城県史編纂委員会編『宮城県史1（古代史・中世史）』、宮城県史刊行会、1957、114～116頁、前掲5）44頁の注121）、前掲67）135頁。
- 69) 前掲12）①。なお、原は「履歴書」で「史学専修科」と誤記している。
- 70) 郁文館学園百年史編纂委員会編『郁文館学園百年史』、郁文館学園、1989、13～46頁。
- 71) 「史界の二慶事」、史学雑誌9-11、1898、997頁。
- 72) 前掲70）44頁。
- 73) 郁文館夢学園総務課の木内真知子氏からのご教示による。
- 74) 卒業生には、後に東京帝国大学助手や慶應義塾大学講師などを務めた考古学者柴田常恵がいるが、原と時期的には重なっていないようである。前掲70）44頁、大場磐雄編『日本考古学選集12 柴田常恵』、築地書館、1971、296頁。
- 75) 『郁文館学園百年史』によれば開講後数年で廃校になったという。前掲70）44頁。
- 76) 『郁文館学園百年史』掲載の「郁文館中学分館旧教職員」には原の名前と担当科目（歴史・地理）はあるが、退職年は記載されていない。前掲70）453頁。
- 77) 前掲12）①。
- 78) 明治大学史資料センターの村松玄太氏からのご教示による。
- 79) 「文科開始」、明治学報107、1906、63頁。
- 80) 藤沢衛彦「明治文学会」、明治学報110、1907、63頁。なお、この「明治文学会」の賛助員には夏目金之助（漱石）や翻訳詩集『海潮音』で知られる上田 敏なども名を連ねていた。
- 81) 「職員採用之義二付上申」、『華族女学校・学女 明治三十九年同四十年 進退録』、学習院院史資料室所蔵。
- 82) 「辞任御願」、『学習院女学部 明治四十一年 進退録』、学習院院史資料室所蔵。
- 83) 学習院百年史編纂委員会『学習院百年史 第一編』、学習院、1981、507～515頁。
- 84) ①「講師異動」、國學院雑誌13-10、1907、1033～1034頁、②國學院大學校史資料課編『國學院大學百年史（上巻）』、國學院大學、1994、405～406頁。
- 85) 「学則改正」、國學院雑誌16-10、1910、1107～1109頁。
- 86) 國學院大學研究開発推進機構伝統文化リサーチセンター客員教授の益井邦夫氏からのご教示による。
- 87) 「本学年の各学科及担当講師」、國學院雑誌18-9、1912、838～839頁。
- 88) 「原博士、塩井博士の逝去」、國學院雑誌19-3、1913、269頁。
- 89) 前掲1）②2頁。
- 90) 「国史学会発会式」、國學院雑誌15-12、1909、1310頁。
- 91) 「忘年会」、國學院雑誌15-1、1909、127頁。
- 92) 原が勤務していた当時の國學院大學は大学部と師範部を存置していた。大学部には国史・国文の2科が、師範部には国語漢文科と歴史地理科の2科があった。前掲84）②412頁。
- 93) 『早稲田中学講義』は、何らかの事情で中学校に進学できない小学校卒業生に対し、中学校卒業程度の学力を2年間で修得させるという内容のものであった。早稲田大学大学史編集所『早稲田大学百年史 第二巻』、早稲田大学、1981、483～484頁。
- 94) 当時の早稲田中学職員録に原の名前は見当たらないことから、教壇には立っていないことが分かる。中野礼四郎編『創立二十五周年記念 早稲田中学校創業要録』、早稲田中学校、1921、38～46頁。
- 95) 早稲田大学大学史資料センター所蔵の『早稲田中学講義 第一学年 明治四十年年度』

- (1~24号)所収の日本史講義(原 秀四郎)を調査し、早稲田大学出版部刊行の『日本史講義』と同一内容であることを確認した。
- 96) 原が在職した時期の國學院大學大学部国史科などの卒業生を『國學院雑誌』により拾い出し、その後の動向を確認したが、歴史地理学ないし地理学の研究者となった人物は管見の限り見当らなかった。史学館卒業生については本文で既述。
- 97) 例えば当時の國學院大學卒業生の進路を見ると、大半が中学校や高等女学校、実業学校といった中等教育機関への就職であった。「新卒業生就職状況」, 國學院雑誌13-9, 1907, 97頁など。史学館については、前掲71) 997頁を参照。
- 98) 読図生「地名の解釈」, 歴史地理3-9, 1901, 659頁。
- 99) 神保小虎「地理学者にアイヌ語学の勧め」(同『地理学叢話』, 博文館, 1908), 16~25頁。
- 100) 原は博士主論文「王朝時代東北地方拓殖二関スル史蹟ノ研究」でも、「東北拓殖歴史の史料として地名は頗る貴重」としている。前掲52) 第一冊から引用。
- 101) ①原 秀四郎「薩南海上に於ける地名研究の一節(一)」, 地学雑誌18-213, 1906, 581~585頁。なお、原は明治40(1907)年の論考「歴史地理談」でもほぼ同じテーマを扱っている。②原 秀四郎「歴史地理談」, 太陽13-10, 1907, 208~211頁。
- 102) 前掲101) ①584~585頁。
- 103) 原 秀四郎「本邦の歴史名辞をアイヌ語によりて解明すること」, 神社協会雑誌8-2, 1909, 1~3頁。
- 104) 前掲101) ②211頁。
- 105) 柳田国男は昭和5(1930)年に刊行された刀江書院版『蝸牛考』において、初めて「方言周圏論」を提唱している。柴田 武「方言周圏論」(大藤時彦編『講座日本の民俗1総論』, 有精堂出版, 1978), 42頁。「方言周圏論」とは、方言が文化的な中心地から同心円状に分布する場合、その中心地から遠い地域に見出される方言ほど歴史的に古いとする考え方である。
- 106) 柳田は『蝸牛考』のなかで、原やその論考については全く触れていない。柳田国男『蝸牛考』, 刀江書院, 1930。
- 107) 坂口徳太郎『奄美大島史』, 三州堂書店, 1921, 15~16頁。
- 108) 前掲15) 題辞。
- 109) 前掲15) 自叙2頁。
- 110) 前掲15) 自叙2頁。
- 111) 前掲15) 「日本国史地理」123~127頁。
- 112) 前掲15) 「日本国史地理」凡例1頁。
- 113) 小林健太郎は菊地の『日本歴史地理総概説』を「一人の著者によってまとめ上げられた日本の歴史地理に関する概説書としては、初めての刊行物である」と評しているが、原の『日本国史地図 附日本国史地理』こそ嚆矢というべきであろう。小林健太郎「(書評) 菊地利夫著 日本歴史地理概説」, 歴史地理学128, 1985, 40頁。
- 114) 前掲15) 「日本国史地理」123頁。
- 115) 前掲15) 「日本国史地図」凡例5頁。
- 116) 前掲2) ②720頁。
- 117) 喜田(貞吉一筆者注)「本誌の編者に代って片々録の寄稿者に一言す」, 歴史地理9-1, 1907, 52頁。
- 118) 前掲2) ③65~66頁。
- 119) 前掲2) ②720頁。
- 120) 島津俊之「小川琢治と紀州一知の空間論の視点から」, 地理学評論80-14, 2007, 901頁の注5) 参照。小川が通常使用したペンネームは「零丁学人」または「零丁学士」だが、「零丁」も小川のものとなした。
- 121) 前掲2) ①988頁。
- 122) 羅生「片々録」, 歴史地理9-1, 1907, 50~51頁。
- 123) 前掲2) ①987~988頁, 前掲2) ③66頁。
- 124) 『沿革考証 日本読史地図』は明治30(1897)年に河田 巖・吉田東伍・高橋健自の3者連名で発行されたが、その後大正6(1917)年に吉田東伍の名で『新編 日本読史地図』が、同12年にその増訂版が発行された。昭和10(1935)年には蘆田伊人により大幅な修正が加えられて『大日本読史地図』の書名で刊行されている(昭和15年頃まで

- 重版)。雑誌『歴史地理』は『大日本読史地図』について、「本邦読史地図としては全く独壇場のものとして国史研究者にとって最も便利なものである」と高く評価している。花見（朔巳一筆者注）「(新刊紹介)大日本読史地図 故吉田東伍著 蘆田伊人補」, 歴史地理66-2, 1935, 228頁。
- 125) 原 秀四郎『中等国史地図』, 博文館, 1907, 緒言1頁。
- 126) 原 秀四郎『新編国民地図 分冊之上』, 弘道館, 1910, 凡例1～2頁。なお, 表紙の書名は単に『新編国民地図』となっており「分冊之上」の文字は入っていないが, あとがきと奥付にはそれぞれ「分冊之上」, (上)と記載されている。
- 127) 『新編国民地図 分冊之上』で予告された同『分冊之下』の収録内容から判断すると, 原家に残る「新編国民地図要論」が『分冊之下』に相当すると思われる。原 秀四郎「新編国民地図要論」(手稿), 原家所蔵。
- 128) 原は大学卒業後に一度結婚しているが, その後離別しており, 子供はいなかった。前掲1) ②3頁, 前掲44) 413頁。このため, 原家は四男の真十郎が継いでいる。
- 129) 前掲1) ②3頁。
- 130) 前掲1) ②3頁。
- 131) 原 真十郎「越智郡郷土誌材の出版について」(原 秀四郎『越智郡郷土誌材』, 渦潮社, 1929), 6～7頁。
- 132) 原 秀四郎「越智郡郷土誌材に就きて」, 前掲131)『越智郡郷土誌材』, 1頁。
- 133) 前掲132) 小叙。
- 134) 前掲132) 18～25頁。
- 135) 玉田栄二郎「御遺稿の上梓に就いて」, 前掲131)『越智郡郷土誌材』, 4頁。
- 136) 前掲131) 6～7頁。
- 137) 原 秀四郎『越智郡郷土誌材』, 東豫新聞社, 1914。
- 138) 前掲131)『越智郡郷土誌材』
- 139) 前掲44) 413頁。
- 140) 前掲1) ②2～3頁。郷里波止浜にある原の墓碑銘(文学博士田中義成撰)にも, 未刊書に関する記述が見られる。
- 141) 前掲17) 192頁。
- 142) 前掲22) 37頁。
- 143) 前掲44) 412～413頁。
- 144) 前掲3) ②37頁。

Hideshiro Hara: Historical Geographer of the Meiji Era: An Examination from a Biobibliographical Perspective

KAWAI Ichiro

Hideshiro Hara (1872–1913) was the first Japanese historical geographer to hold a doctorate in historical geography, and the height of his career was enjoyed during the Meiji era (1868–1912). His primary work, *Nihon Kokushi Chizu Fu Nihon Kokushi Chiri (Japan Historical Atlas with Japan Historical Geography, 1906)* is a novel work that received high acclaim in the academic arena of geography at the time. Nevertheless, today, Hara is a long-forgotten historical geographer in the geographic world, with no later research taking note of his achievements. Thus, this study intends to illuminate Hara's academic life and achievements through the biobibliographical approach. By means of such pursuit, this study aims to contribute to the clarification of the history of historical geography in Japan.

As a result of the examination, the following points have become apparent: 1) Hara studied at the Graduate School of Tokyo Imperial University under Kumezo Tsuboi, who assumed a pioneering role in introducing modern human geography, and succeeded to his theory. 2) Although he was involved in the establishment of the *Nihon Rekishi Chiri Kenkyukai* (Japanese Society for the Research of Historical Geography) during his years at the Graduate School, he did not participate much in its activities so as to concentrate on his research. 3) At the Graduate School, Hara focused primarily on the study of the frontier of the ancient Tohoku region (the northeastern area of Honshu) and attempted to examine its development, administrative and military bases, traffic routes, and so forth. His method of research was empirical, centering on the observation of ruins and landform, and place-name research at the actual site. This research was highly evaluated and Hara was therefore awarded a doctorate from Tokyo Imperial University in 1905. Hara's research method has something in common with the methods used in today's historical geography research. 4) After obtaining a doctorate, he engaged in educational activities at Kokugakuin University, Meiji University, and so forth while furthering his studies in historical geography. In particular, Hara devoted himself to place-name research and the creation of historical atlas. 5) Hara died at the young age of 42 in 1913 and consequently did not get to fully publicize his vast research findings, including his doctoral dissertation. In addition, Hara did not have any successors to his scholarship and, thus, this has likely caused him to be forgotten in the geographical world today.

Key words: Hideshiro Hara, history of historical geography, doctoral dissertation, historical atlas, biobibliographical approach